

ルカの福音書 70回  
食卓での諸々の教え（2）

14：12～24

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②ルカ13：18から、中心テーマが「神の国」に変わった。
- ③神の国とは、メシア的王国（千年王国）のことである。

(2) ルカ13：18～14：35の内容

- ①神の国のたとえ話（13：18～21）
- ②神の国への入国（13：22～30）
- ③神の国の延期（13：31～35）
- ④食卓での諸々の教え（14：1～24）
  - \*水腫の人の癒やし（1～6節）
  - \*結婚の披露宴のたとえ話（7～11節）
  - \*客を招くときの教訓（12～14節）
  - \*盛大な宴会のたとえ話（15～24節）
- ⑤弟子の代価（14：25～35）

(3) 注目すべき点

- ①4つの教えは、パリサイ人の家での食卓でイエスが語ったものである。
- ②直前の文脈を見ると、イエスはエルサレムの崩壊を予告された（13：35）。

Luk 13:35 見よ、おまえたちの家は見捨てられる。わたしはおまえたちに言う。おまえたちが『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』／と言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」

- ③ここでは、その原因がリーダーたちにあることが明らかになる。

2. アウトライン

- (3) 客を招くときの教訓（12～14節）
- (4) 盛大な宴会のたとえ話（15～24節）

3. 結論

- (1) 客を招くときの教訓が教える霊的真理
- (2) 現代版「盛大な宴会のたとえ話」

食卓での諸々の教え（2）について学ぶ。

### Ⅲ. 客を招くときの教訓（12～14節）

#### 1. 12節

Luk 14:12 イエスはまた、ご自分を招いてくれた人にも、こう話された。「昼食や晚餐をふるまうのなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどを呼んではいけません。彼らがあなたを招いて、お返しをすることがないようにするためです。

- (1) 結婚の披露宴のたとえ話（7～11節）は、客たちに向けたものであった。
  - ①謙遜は、神の国での重要な資質の1つである。
  - ②人は、自分で上席を選ぶことはできない。
  - ③自らを低くする（イエスの弟子になる）なら、神が高く上げてくださる。
  
- (2) 客を招くときの教訓（12～14節）は、主人に向けたものである。
  - ①社会的側面
  - ②霊的側面
  
- (3) イエスは、お返しができる人たちを呼んではならないと言われた。
  - ①お返しができる人たちを招いた場合は、お返しを受けるだけで終わる。

#### 2. 13～14節

Luk 14:13 食事のふるまいをするときには、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、足の不自由な人たち、目の見えない人たちを招きなさい。

Luk 14:14 その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。あなたは、義人の復活のときに、お返しを受けるのです。」

- (1) 主人が食事に招くべき人たちとは、お返しができない人たちである。
  - ①貧しいひとたち
  - ②からだの不自由な人たち
  - ③足の不自由な人たち
  - ④目の見えない人たち
  
- (2) この原則は、神が罪人を神の国に招く時の原則と同じである。
  - ①神は、無価値な者を招いておられる。

\*イエスの奉仕の特徴は、貧しい人たちを招くことであった。
  - ②これによって、神は栄光をお受けになる。
  - ③ルカ 4：18～19

Luk 4:18 「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わ

たしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、

Luk 4:19 主のめぐみの年を告げ知らせるのである」。

(3) 貧しい人たちを招いた主人は、義の行いをしたことになる。

①その主人は、義人の復活のときに、神から報いを受ける。

\*この主人は、信者である。

\*この主人の行動は、信仰から出たものである。

②訳文の比較

「あなたは、義人の復活のときに、お返しを受けるのです」（新改訳 2017）

「正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる」（新共同訳）

「正しい人々の復活の際には、あなたは報いられるであろう」（口語訳）

③ここでのイエスの教えは、深遠な霊的真理を含んでいる。

#### IV. 盛大な宴会のたとえ話（15～24 節）

##### 1. 15 節

Luk 14:15 イエスとともに食卓に着いていた客の一人はこれを聞いて、イエスに言った。「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう。」

(1) 客の一人が、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。

①彼は、イエスが神の国の宴会について教えていることを理解した。

②彼は、自分はその宴会の席に招かれると確信していた。

③神の国の宴会に招かれるのは、パリサイ人の特権であると思っていた。

(2) イエスは、この機会を捉えて、誰が神の国に入るのかについて教える。

①ここでも、謙遜の重要性が教えられる。

##### 2. 16～17 節

Luk 14:16 するとイエスは彼にこう言われた。「ある人が盛大な宴会を催し、大勢の人を招いた。

Luk 14:17 宴会の時刻になったのでしもべを遣わし、招いていた人たちに、『さあ、おいでください。もう用意ができましたから』と言った。

(1) このたとえ話の意味

①主人は、神に対応している。

\*神は、メシア的王国を準備された。

②しもべは、イエスに対応している。

\*御子イエスは、神の国の到来を宣言し、人々を招かれた。

③招かれたのは、主にユダヤ人である。

\*彼らは、「招いていた人たち」である。

④イエス時代、宴会の準備には時間がかかった。

\*神は、時間をかけて御国の宴会の準備をしておられた。

### 3. 18～20 節

Luk 14:18 ところが、みな同じように断り始めた。最初の人是这样言った。『畑を買ったので、見に行かなければなりません。どうか、ご容赦ください。』

Luk 14:19 別の人は这样言った。『五くびきの牛を買ったので、それを試しに行くところです。どうか、ご容赦ください。』

Luk 14:20 また、別の人は这样言った。『結婚したので、行くことができません。』

(1) ところが、みな同じように断り始めた。

①断りの理由が3つ、代表例として挙げられている。

②これ以外にも、多くの理由が考えられる。

③これは、優先順位をどうするかという問題である。

(2) 3つの理由

①「畑を買ったので、見に行かなければなりません」

\*この人は、土地の所有者となったことを誇っている。

\*この人は、共同体の中で尊敬を受けることを期待している。

②「五くびきの牛を買ったので、それを試しに行くところです」

\*この人は、宴会への招きよりも、新しく手に入れが牛に興味がある。

\*この2人は、買う前に十分吟味していたはずである。

\*買ってからも吟味しようとするのは、物欲に支配されているからである。

③「結婚したので、行くことができません」

\*この人は、宴会への招きよりも、人間関係を優先させた。

### 4. 21～22 節

Luk 14:21 しもべは帰って来て、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、そのしもべに言った。『急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たちをここに連れて来なさい。』

Luk 14:22 しもべは言った。『ご主人様、お命じになったとおりにいたしました。でも、まだ席があります。』

(1) 主人が怒るのは、当然のことである。

- ①主人は、恵みによる招きを与えていた。
- ②主人は、大きな犠牲を払って宴会の準備をしてきた。
- ③拒否は、主人に対する侮辱である。
- ④この招きを拒否したのは、イエス時代の宗教的指導者たちである。

(2)「急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たちをここに連れて来なさい」

- ①そこで主人は、指導者たちが見下していた者たちを招くことにした。
- ②宴会の準備ができていたので、急いで新たな客を招く必要があった。
- ③多くの人が招きに応答したが、まだ席に余裕があった。
- ④そこで主人は、意外な人たちまで招くことにした。

#### 5. 23～24節

**Luk 14:23** **すると主人はしもべに言った。『街道や垣根のところに出て行き、無理にでも人々を連れて来て、私の家をいっぱいになさい。**

**Luk 14:24** **言っておくが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人もいません。』」**

- (1) 当時の習慣では、客が全員揃うまで宴会は始まらない。
  - ①そこで主人は、しもべを町の外まで遣わすことにした。
  - ②「街道や垣根のところ」にいる人たちとは、異邦人である。
    - \*彼らは、町から遠く離れた所にいる。
    - \*彼らは、契約から遠く離れた人たちである。
  - ③「無理にでも人々を連れて来て、私の家をいっぱいになさい」
    - \*意志に反してという意味ではなく、熱心に招くことである。
  
- (2) 「あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人もいません」
  - ①最初から招かれていた人たちは、不信仰のゆえに、神の国から除外される。
  - ②それとは対照的に、契約の外にいた異邦人が招かれる。
  - ③異邦人の救いは、ルカの福音書と使徒の働きを貫くテーマである。

#### 結論

##### 1. 客を招くときの教訓が教える霊的真理

- (1) お返しができない人たちを招くべきである。
- (2) 霊的真理
  - ①その原則を実行する人は、信者である。

- ②彼の行為は、信仰から出たものである。
- ③彼には復活が約束されている。
- ④それが成就するのは、携挙が起こったときである。
- ⑤彼は、神からの報いを受ける。
- ⑥キリストの御座の裁きにおいて、それが起こる（1コリ3：12～15）。

## 2. 現代版「盛大な宴会のたとえ話」

- (1) 山田さんは、新築祝いを計画した。
  - ①上司A、同僚B、部下Cを招いた。
  - ②妻は、3日間かけて食事の準備をした。
- (2) 祝いの当日、彼らに声をかけた。
  - ①上司Aは、高層マンションを買ったので見に行かなければならないという。
  - ②同僚Bは、大口の契約を結んだので、内容を確認する必要があるという。
  - ③部下Cは、新婚なので妻と時間を過ごしたいという。
- (3) その知らせを聞いて、妻は激怒した。
  - ①上司Aは、物欲に支配されている。
  - ②同僚Bは、ビジネスを優先させている。
  - ③部下Cは、人間関係を優先させている。
- (4) 妻は、新たに客を招くことにした。
  - ①ご近所の人たちを招く。
  - ②さらに、ホームレスの人たちを招く。
- (5) 今も、多くの人たちがイエスの招きを断っている。
  - ①物欲、仕事、人間関係
  - ②これは、救いを用意してくださった神への侮辱である。
- (6) 現代版のたとえ話には、重大な欠陥がある。
  - ①神の国の宴会への招きと、新築祝いへの招きは、大いに異なる。